

毛筆書写教育における実技指導技術

「書道概説」より

飯森 由美

Practical skill guidance technology in the writing burush handwriting education “A calligraphy general statement”

Yoshimi IIMORI

1 はじめに

小学校学習指導要領において、国語科の中で第1学年から硬筆書写、第3学年から毛筆書写が設定されている。

しかし、児童に指導する教師側の指導力の実態はどうであろうか。

小学校教員はほとんど全教科の教科を担当するため、教科に対して得手・不得手があるのは当然と言える。

また、大学・短大の教員養成課程において、書写指導に関する講座が設定されてはいても選択であり、必修という拘束力がないため単位認定はされても教員として十分な力を習得できないままに教壇に立つことが多い。

また、現場教員対象の研修も地区の教育委員会主催で実施されてはいても、研究校でもない限り全員対象にはなりにくい。

ここでは、現場教師の書写指導における実技表現力の実態調査をもとにして、本学の「書道概説」の授業の中で学生が習得すべき表現技術と児童に対する指導法をいかに工夫するかについて実践の取り組みをまとめたものである。

2 現場教師対象のアンケートから

ここに掲載するものは小学校の国語科書写教育に携わる学校現場の実態調査の結果である。

調査対象 千葉市立小学校 12校 (196名)

調査時期 2008. 9

1. 毛筆書写指導について実技指導に自信がありますか？

ア ある。(33.3%) イ あまりない。(58.1%)

ウ まったくない。(5.6%)

2. 3学年から毛筆書写学習が実施されます。横画・縦画について教科書に図(1)図(2)のような筆使いの説明がありますが、どのように指導しますか？(複数回答可)

ア 先生が範書して筆使いの見本を示し説明する。(90.8%)

イ 口頭のみで説明する。(2.4%)

ウ その他の方法 (8.2%)

3. 先生は図(1)・図(2)のような筆使いの表現が可能ですか？

ア 可能である。(52.6%)

イ なんとか表現できる。(38.3%)

ウ 不可能である。(6.1%)

4. 左払い・右払いについても、教科書に図(3)のような筆使いの説明があります。

2と同様に答えてください。(複数回答可)

ア 先生が範書して筆使いの見本を示し説明する。(88.3%)

イ 口頭のみで説明する。(2.0%)

ウ その他の方法 (5.6%)

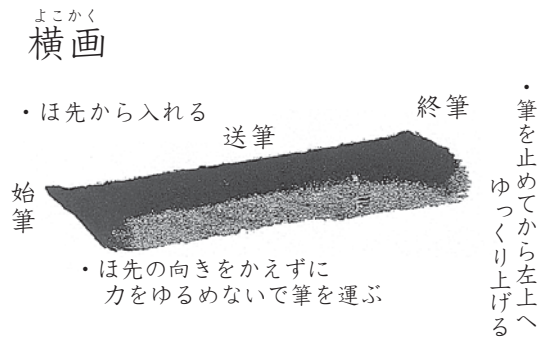
5. 先生は図(3)のような筆使いの表現が可能ですか？

ア 可能である。(51.0%)

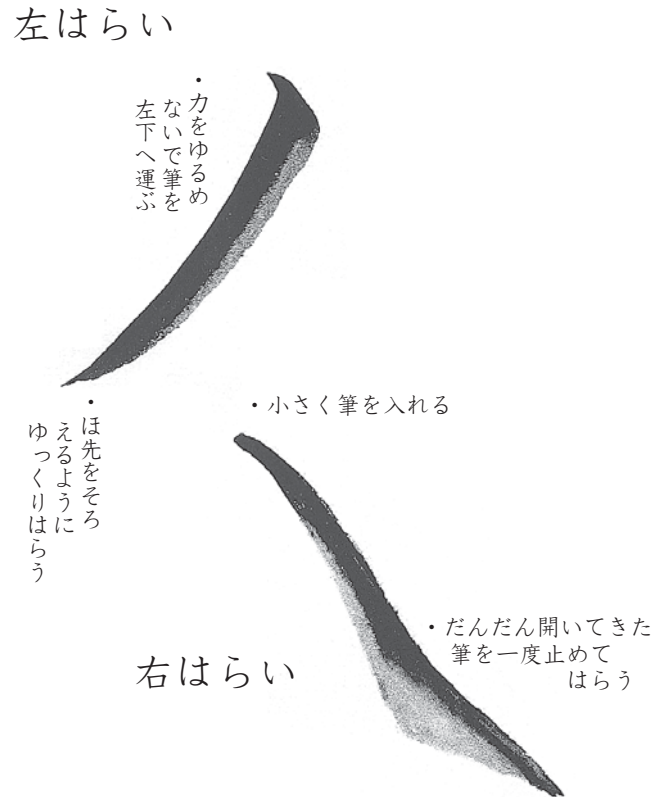
イ なんとか可能である。(44.4%)

ウ 不可能である。(4.6%)

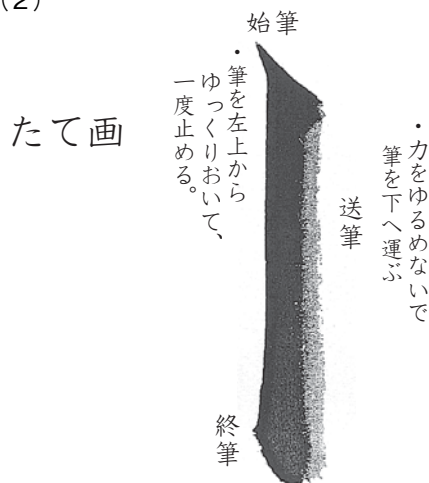
図(1)



図(3)



図(2)



小学校においては、授業者の書写指導力不足の実態を学校内外から聞くことが多い。

授業者は自己の指導力についてどう評価しているのかということを知るがこの調査の目的であった。

この調査の結果の数値が示すところによると、自信を持って授業に取り組んでいるものは約3割である。これに関しては想定通りといえるが、基本点画の筆使いの表現が可能であるかという問いに対しては、筆者の予想をはるかに超えており、「基本点画の表現が可能である」と回答したものは「なんとか可能である」を含めて8～9割という結果が出た。

授業者自身の自己評価と客観的評価には乖離がみられるということが言えるのではない。

また、現場教師を指導する立場にある書写部会の指導者や指導主事が現場教師に対する客観的評価も調査

する必要性も考えられる。

現場教師の書写指導に対する価値観はどうであろうか。一般的な学力面に直接反映する学習ではないから軽視するという意識はないだろうか。

特に、小学校教師の板書の文字は書写教育以前の初等教育における大事な一要素である。

3 「書道概説」授業報告

本学の授業「書道概説」は小学校国語科書写教育について学ぶ内容である。この拙稿は其中で、特に小学校教師を目指す学生の書写表現力の習得についての授業研究報告である。

現行の学習指導要領の国語科の中に〔第3学年及び第4学年〕の〔言語事項〕(2)の「ア書写に関する事項の(ウ)毛筆を使用して点画の筆使いや文字の組み立

て方に注意しながら文字を整えて書くこととある。

新指導要領は2011年全面実施であり、現在は周知・移行期間である。(ウ)の部分は点画の種類を理解するとともに、毛筆を使用して筆圧などに注意して書くことと変更された。第5学年及び第6学年においては、現行の(ウ)毛筆を使用して、字配りよく書くことから新指導要領では毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くことと変更された。これは従来に比較すると、表現技術が難しくなったといわざるを得ない。授業者側にも意識の高揚と技術の習得が求められる。

本論では点画の筆使いについて毛筆を使用して漢字を書く場合の基本点画のうち①横画②縦画③払いの三つの基本点画について考察したものである。

小学校書写教科書でどのように基本点画を表現するのかということは図示されている。

次の表はその表現法を学生達が学習後に自己評価し、また児童にどのように指導したらよいかという観点を「書道概説」の授業の中で学生が授業終了時にまとめたものの中から各々数名ずつ選んだものを提示したものである。

学生の自己分析によると、各々よく考え工夫していることがわかる。その問題点はそのまま児童に教える際の工夫にも関連してくる。

表(1)のB、C学生は運筆の速度を問題としている。運筆の速度により書かれた文字のイメージが変わることに気づいている。B学生は児童にも意識させるべく考えている。書く速さについては、現行の指導要領では明記されていないが、新指導要領においては、第5学年 6学年で明記されるようになった。運筆の速度を意識させることは専門的には難しく、どの部分を早くしたり、遅くしたりするのか授業者側にその専

表(1) 横画について

学生	学生の筆使いについての自己分析	児童に指導する際の留意点
A	始筆で穂先を入れる角度・穂先の置き方が難しい。終筆部で穂先を左上に上げることが出来なかった。	終筆部で穂先を整えると、次の点画が入りやすい。少し右斜めになるように指導する。
B	運筆の際、速度を速くするようにしたい。	運筆の際、速度により文字のイメージが変わることに気づかせる。
C	速度が速かったため、かすれてしまった。	始筆に角度がつかない児童がいると思われる。「三角のお山ができるね」などと言ってわかりやすい言葉で説明する。
D	線の太さがまちまちだったり、かすれたりする。	墨量と送筆の関係を考えさせ、調整や加減ができるように指導する。 実際にどういう動きかを大きい筆を使用し見本を見せる。
E	終筆部が難しい。終筆の処理の仕方で穂先が出てしまう。終筆部で速度をゆっくりにして丁寧にまとめることと下に押し付けないように心掛けた。	
F	終筆で止めて左上に上げることがうまくいかない。	始筆は穂先から入るように気をつける。 送筆は穂先の向きをかえず、力をゆるめないように注意する。 終筆は筆を止めてから左上にゆっくり持ち上げるように指導する。

門的技術が求められる。また、D学生は自分の体験から墨量と運筆の関係を考えさせ調整や加減できるように指導し、その際指導者が範書して見本を示すとある。この学生は見本が示せるという自信を持つようになったことが察せられる。E学生は終筆について、速度をゆっくり圧力をかけて押付けないように心掛けるとある。筆圧についても新指導要領で扱われるようになった。F学生はその終筆の扱いについて、自分自身が左

上に穂先を上げることがうまくいかないとして、児童には筆を左上にゆっくり持ち上げるように指導するとしている。

教科書に掲載されているような点画を形成するために教師側が習得することは、始筆から終筆にいたるまで穂先に留意することである。このことは他の基本点画の形成についても同様のことがいえる。

表（2）縦画について

学生	学生の筆使いについての自己分析	児童に指導する際の留意点
G	何度書いても左右どちらかに曲がる。そのことを気かけると別の部分が悪くなるので、一つ一つの動きに注意して書きたい。	教科書の説明の際、穂先の入り方に注意し、筆を左上に置き一度止まり、力を緩めずに下まで運ぶ。
H	送筆の際、途中から筆先が上になってしまうことがあるので気をつけたい。	始筆・送筆・終筆の基本について、よい例とよくない例を示して説明する。
I	上から下へ引きおろす際、ゆっくりがよいか勢いがあつた方がよいか？	上から下へ引きおろす際、「自分のお臍に向かって引く」ようにさせる。
J	まっすぐ書けない。ゆっくり書きすぎているからか？	
K	同上	始筆で一度しっかり止めること。送筆で穂先が左側を通ることを範書により見本を示す。
L	始筆から一気に引いたら弱弱しくなったため、一度止めてから書いたほうがうまくいった。	始筆は一度止めるが、穂先の向きは変えず送筆の太さも変えないようにさせる。

縦画がまっすぐに引けないという難しさがあるようだ。速度に関係があると考えた学生が多い。H学生は途中から穂先が上を向いてしまうことを問題としている。これについては大きな問題提起として授業の中で捉えなければならない。教科書は側筆の原理にそって

作られているが、直筆中穂の原理によれば肯定されるわけである。児童の中にもこうした表現をする場合があったら、教科書通りでなくても否定をしてはならない。教科書を越えた発展的学習として扱うことにすべきである。

払いについて

表（3）（左払い）

学生	学生が書いたものに対する自己分析	児童に指導する際の留意点
M		筆を最後まで「見送ってあげる」と終筆の部分を「あわてずにゆっくり」筆を運ぶことを教えたい。 左払いの終筆は次の点画へつながるように腕を回すことを手本を見せながら説明する。

N	穂先を意識しなかったため終筆が汚くなってしまった。	穂先が常に左側にあるように意識させながら払うことを指導。
O	力の入れ方がわからず同じくらいの力のまま送筆してしまった。練習を重ね次第に「筆の先の動きをよく見る」ことができるようになった。	筆が半紙から離れるまで目を離さないようにして、体全体で払うようにさせる。

表（４）（右払い）

学生	学生の書いたものに対する自己分析	児童に指導する際の留意点
P	始筆は丁寧に、そしてそこから速度を速め、だんだん太くしていったが、一度止めた後、払いまで穂先がまとまらず、どんどん払いが長くなってしまった。払いだす部分の下部分がぎざぎざになってしまった。 穂先を上にしたままで細くしていったらきれいに仕上がった。	始筆は丁寧に、その後は速度を上げる。一度止めるところから穂先に注目し、ゆっくり払うように指導する。
Q	三角の部分に気をとられ始筆が弱弱しくなった。	三角形の部分がいきなり太くなっているのではなく、徐々に太くなっていることに気づかせる。力がどのように加わっているかを考えさせ、試みさせる。
R	始筆から終筆まで同じ太さになってしまった。	まず、小さく筆を入れる。そこから次第に筆を開いてゆき、一度止めて筆をまとめてから終筆を意識して払う。
S	終筆が汚くなってしまう。始筆から終筆にかけてやや盛り上がってしまう。	墨を十分につける。 払う直前までは勢いよく筆を運ぶようにする。終筆は穂先が常に上側にあるようにしながら筆をややねじるようにする。

右払いは楷書の基本点画における用筆法で、一般的に最も難しいといわれる。この筆使いが可能である者でも最初から安易に身についたわけではないといっても過言ではない。いかに工夫し達成するかが課題である。

表（４）のR学生は始筆から終筆まで同じ太さになってしまったと自己分析している。そして、児童には、まず小さく筆を入れ（始筆）そこから次第に筆を開いてゆき、一度止めてから終筆を意識して払うように指導すると考えている。Q学生は終筆部分に気をとられ始筆が弱弱しくなったと分析しており、三角形の部分まで徐々に太くなることに気づかせ筆圧に言及してい

る。

またP学生は終筆部分で穂先がまとまらず、下部がぎざぎざになることについては、穂先を上にしたまま細くしていくときれいにまとまるとしている。児童には、一度止めて穂先に注目しゆっくりと払うように指導するとしている。

いずれにせよ、穂先に配慮させることが横画・縦画と同様に大事である。

さらに、S学生は右払いに関しては墨量にふれている。墨量が不足するとどっしりとしたきれいな終筆を形成することは不可能である。

技術指導は指導者側の一方的な説明に終始しがちであ

るが、児童に考えさせながら気づかせるような配慮をしている。学生たちは小学校の教科書をもとに自ら書く体験を通して指導法を考察している。

4 まとめ

この報告の中で、毛筆書写における漢字の基本点画上の横画・縦画・左払い・右払いについて取り上げた。

いかなる基本点画においても、毛筆の穂先をいかに使うかということが重要である。新学習指導要領は従来明記されていない穂先の扱いについて第5学年・第6学年の指導の中で明記されるようになった。

この授業を通して学生たちは穂先に対して意識が高まってきたことは確かである。この授業を選出した学生たちは必ずしも高校生で書道を選出したり、過去に塾で指導を受けたりした学生が多いわけではない。また、そのような体験のある学生であったにせよ、学習環境はさまざまであるため、基本点画の習得も種々さまざまで、小学校国語科毛筆書写の指導に基づいた指導を受けたかということも疑問視されることも否定できない。

小学校教師を目指す学生たちは、基本点画に対する意識付けがなされたことになる。従って、学校現場において書写の表現力・指導法について前向きに取り組む素地はできたのではないか。

こうした学習をせずに教壇に立った場合は書写の授業が重荷であったり、面倒に思ったり、十分な指導意識を持って取り組めないことになる。

この授業を終了しても、各基本点画の用筆法について完璧にマスターしたとは言いきれない。しかし、学生が自分自身が書いたものに対して自己分析したことは、それがまた児童の問題点にも繋がることにもなり、児童への指導に生かせると考えられる。

新学習要領は書写の分野においても従来のものよりも表現技術により専門的な表現が求められている。筆使いについて「穂先の動き」「筆圧」「書く速さ」という文言が登場してきた。

現場教師対象の調査結果に見られるように、想定を超えたよい結果が出ていることをそのまま是認すること

はできない。

教師達の自己評価と第三者の客観的評価の間には乖離があるのではないか。

現場教師の毛筆書写指導に対する意識の高揚をはかる研修制度の充実と教員養成課程におけるカリキュラムの検討が今後の課題である。

参考資料

小学 書写3（教育出版）

小学校学習指導要領解説（平成11年5月 文部省）

小学校学習指導要領 新旧対照表（平成20年4月 東京書籍）